

ソクラテスを、どう教えるか

—ブルナーの「構造化」理論による授業展開例—

愛知県立阿久比高等学校教諭（再任用）
兼松 正人

ソクラテス(前470ごろ～前399ごろ、古代ギリシアの哲学者。その思想は弟子プラトンなどの著作を通じて知られる)の授業展開を具体例として、ブルナー(Jerome Seymour Bruner, 1915～2016、アメリカの教育心理学者。発見的学習法・教科の構造化の提唱者で、教育の現代化運動の推進者。主著『教育の過程』)の教授理論を解説する。

キーワード：アレテー 無知の知 魂への配慮 発見的学習法 構造化(転移と翻訳) 等式の証明

1. はじめに

ソクラテスの授業展開の中心は、「アレテー(徳)」の追求と「無知の知」の啓発とを考え、理解させることにある。ただしそのためであっても、時間的余裕がなければ歴史的背景やエピソードは省略すべきである。むしろ、最初から上の二つの中心テーマを「転移(共感)」させ、生徒自身の人間としてのあり方生き方を考えさせるような授業展開が望ましい。また、授業時間中にソクラテスの「知徳合一」や「福德一致」なども説明できるとよい。

2. アレテー(徳)の追求

高校「倫理」の授業で、ソクラテスをどう教えるべきかを提案したい。ソクラテスの追求したテーマの中心は「アレテー(徳)」であり、それは「人間として善く生きる」と言いかえることができる。したがって、ソクラテスの問題意識は「人間として善く生きるには？」ということになる。この問題意識は、誰もが一度は抱いたことがあるような問いであり、当然教室の高校生たちにも「転移(共感)」していくと思われる。授業の導入時間でもっとも大切なことは、このように先哲の問題意識を「転移(共感)」させることである。

(1) デルフォイの神託

古代ギリシアに生きたソクラテスの問題追求の出発点は、「デルフォイの神託」として知られている「ソクラテスに優る賢者はいない」という神託である。このデルフォイにあるアポロン神殿の神託の内容には、ソクラテス自身も驚き、疑い、そして、自

分に優る知者をさがす「問答」を始めた。

なぜなら、ソクラテスは、人間にとってもっとも大切と思われる「善く生きる＝アレテー(徳)」を知らず、だからそれを知ろうと探求を続けている。そんな自分がどうしてもっとも優れた賢者であろうかと疑い、問答を始めたのである。

(2) 「無知の知」と「魂への配慮」

このように「問題意識」→「出発点」→「方法」と授業展開していくと授業内容は精選され、教室の生徒たちはソクラテスとともに思索していくのである。「問答法」を続けていくうちにソクラテスは神託の意味を理解した。生徒たちも「無知の知」の「真理」を発見するのである。また、次の資料文を活用するのも効果的である。

私自身はそこを立去りながら独りこう考えた。とにかく俺の方があの男よりは賢明である、なぜといえば、私達は二人とも、善についても美についても何も知ってまいと思われるが、しかし、彼は何も知らないのに、何かを知っていると信じており、これに反して私は、何も知りもしないが、知っているとも思っていないからである。されば私は、少くとも自ら知らぬことを知っているとは思っていないかぎりにおいて、あの男よりも智慧の上で少しばかり優っているらしく思われる。

プラトン(1964)『ソクラテスの弁明 クリトン』岩波文庫(改版)、p.21

ここでの留意点は、「善く生きる＝アレテーにつ

いて知らないということを知覚する」ということと「無知の知=知らないことを知っていること」が知ろうという知識欲の源泉であるということである。生徒たちの身近な例で、わからない箇所や問題に出会うと何とか知りたくなったり、解決したくなったりすることを解説するとよい。このように授業展開することで、「無知の知」について単なる知識として覚える学習から、理解し考えるに足る学習へと変化させることができる。

最後に、問題意識へのソクラテスとしての「解答」を提示する。「魂への配慮に心がけることが、人間として善く生きることである」というソクラテスの「解答」は生徒たちのノートに書き写されるが、まだはっきりとは納得されてはいないだろう。そこで、「なぜ、ソクラテスはそのように考えたのか」と問いかけるのである。

(3) 等式の証明

高校生が真剣に考える授業展開を行うためには、授業内容の精選が必要になる。そして、もう一つ大切なことは、考えることを単純化して提示することである。もっとも単純な形式は「 $A=B$ 」という等式を解説するという形であり、私はこれを「等式の証明」とよんでいる。ソクラテスの授業展開では、「なぜソクラテスは、人間として善く生きる(アレテー)には、魂への配慮に心がけることであると考えたのか?」という問いを「アレテーの追求=魂への配慮」という等式で生徒たちに提示するのである。ここがソクラテスの授業展開のヤマ場である。高校生たちは、少しずつ自分の考えを発表し始める。このように単純化することで高校生たちは真剣に考えるのである。ノートに自分の証明例を書かせてもよい。

(4) 資料文と生徒の証明例

以下に、「等式の証明」を考える際に提示した『ソクラテスの弁明』からの資料文と生徒による証明例を提示しておきたい。

「…『好き友よ、アテナイ人でありながら、最も偉大にしてかつその智慧と偉力との故にその名最も高き市の民でありながら、出来得る限り多量の蓄財や、また名聞や名誉のこのみを念じて、かえって、智見や真理やまた自分の霊

魂を出来得るかぎり善くすることなどについては、少しも気にもかけず、心を用いもせぬことを、君は恥辱とは思わないのか?と。」

前掲書『ソクラテスの弁明 クリトン』p.37

【生徒の証明例】

「どんなに地位や名誉があってもうわべだけのものであっては、それは善いものではない。現状におごったりしないで、善く生きるために努力する優れた魂を持った人が、地位や名誉を得たときに初めてそれは善いものになるからである」

「いくら富や健康などを持っていても、魂が荒廃してはそれらはうわべだけのものとなってしまい、生きていても空しいが、魂が善いものであればそれらが十分にそろっていても自分自身満足した快い人生をおくることができるから」

「富・地位・健康が、ほんとうに善いものとなり真に幸福に役立つのは、それらが優れた魂によって活かされるときのみだから、魂への配慮をすることは人間として善く生きることである」

3名の生徒による証明例を示した。いずれもよく考えた文章で正解である。授業展開では、口述筆記させても板書してもよいので、以下のような形で教師による証明例を提示すべきである。

【教師の証明例】

「富や地位、健康などは善いものではあるが、常に善いとは限らない。優れた魂(精神)がこれを用いるときのみ、善いものとなるのである。したがって、人間として善く生きるには、魂への配慮に心がけることである」

3. 授業展開の理論(発見的学習法)

このソクラテスの授業展開例は、アメリカ合衆国の教育学者J.S.ブルーナーの教授理論に基づく実践例である。彼の理論は「発見的学習法」や「構造的な理解」として知られるが、実際の授業展開に応用するには少し工夫が必要である。次の表のようにソクラテスの授業内容を図式化し、精選して実践した。

① 問題	アレテーの追求
② 出発点	デルフォイの神託
③ 方法	問答法
④ 真理	無知の知
⑤ 解答	魂への配慮

これらの項目は、「構造化」を具体的に実践するために創り出した基準である。この項目に従って、学習内容を精選し、授業展開していくことが「発見的学習法」となっていくのである。すなわち、ソクラテスの問題意識を生徒たちの問題意識にも「転移」するようにより単純な形で取り出し、歴史のなかに生きたソクラテスの考察を順番に「追思考」していき、「真理」と「解答」の意味と意義を発見していくのである。

(1) 転移(trans-fer)

ブルーナーの「構造化」理論とは、「転移(trans-fer)」性の高いものを「構造」として抽出する。このとき留意すべきは、教科書の記述を離れるのではなく、教科書に基づいて抽出するということである。多くの「構造」は、教科書の重要語句でありゴシック体になっているものである。けれども、不思議なことではあるが、「構造化」によって抽出され五つの項目に位置づけられた内容は、「オリジナル」として輝き始めるのである。ソクラテスの授業展開例で解説したように、生徒たちは「無知の知」を発見し、問題意識に対する「解答」を考え始めるのである。

高校教師は、一般的に「ソクラテス」の研究者ではない。しかし、「ソクラテスを、どう教えるか」の研究者たるべきではある。思い切って言えば、「どう教えるか」という方法は、もう一つの研究方法たりうる」ということである。すなわち、どう教えるかを工夫していく方法は、文献を読み込んでいくのとは質的に異なる研究方法であり、どの高校や中学校の教師もその意味では研究者たりえるということである。

(2) 翻訳(trans-late)

ブルーナーの「構造化」という手法には、「転移」だけでなく「翻訳(trans-late)」もある。翻訳とは、わかりやすい具体事例や問題形式に言い換えることである。この「翻訳」によって、構造はより「転移」性を獲得し、オリジナル性を増していく。ここでは、

次の学習指導案での「翻訳」例を参照してほしい。

以上のような「発見的学習法」は、プラトンやアリストテレス、カントなどの西洋思想、あるいは日本の思想をはじめとした東洋思想にも「転移」していく。

ここで一つ注意しておきたいことがある。五つの項目による「発見的学習法」は、ブルーナー自身はどこにも著していないということである。あくまでブルーナーの「構造化」の手法は、「転移」と「翻訳」であり、その一つの授業展開への応用方法が、五つの項目(カテゴリー)ということである。したがって、「転移」と「翻訳」という「構造化」の応用方法はほかにもあるということである。そのときの留意点は、授業進度が遅くならず、むしろ内容精選がよりなされ、進度が早くなるほうがよい。教科書本文の記述にはない細かな事項に入り込まないことである。たとえ教科書のほかのページに書かれていることを同時に比較して授業時間の短縮になったとしても、より詳細な内容や資料の説明をすることは「構造化」の目的に反するということである。そうではなく、授業内容を精選して、考えるに足る授業展開を実践することが目的なのである。

4. おわりに

このソクラテスの授業展開例は、ブルーナーの「構造化」という教授方法を解説する典型的な例でもあり、私独自の「問題」から「真理」「解答」にいたる項目(カテゴリー)を用いた最初の授業展開であった。また、授業内容を精選したのち、「等式の証明」で「なぜソクラテスは、人間として善く生きるとは、魂への配慮に心がけることと考えたのか?」と高校生に問いかけ考えさせた最初の授業でもある。このような授業展開は、現代に生きる生徒たちの人間としてのあり方生き方の問題に「転移」する、ブルーナーの提唱した「構造化(現代化)」を高校「倫理」に応用する具体的方法であると私には思われた。

現在にいたる三十余年間、古今東西のさまざまな思想の「構造的理解」を目指し、学習指導案を作成し、授業実践研究を進めてきた。いま一度原点に立ち返り、他者(第三者)にわかりやすく伝わり実践を共有できるような記述に心がけて考察を試みたつもりである。

平成〇〇年度 公民科「倫理」 学習指導案

1 日 時： 平成〇〇年〇〇月〇〇日(〇) 第〇時間目

2 場 所： 〇年〇組 教室

3 クラス： 〇年〇組 〇〇名(男子〇〇名 女子〇〇名)

4 本 時： ギリシアの思想 「ソクラテス」

(1)主 題： ソクラテスの「無知の知」

(2)ねらい： 生徒一人ひとりに「人間として善く生きるには？」というソクラテスの問題意識を追
思考(共感)させて、「無知の知」の真理を発見させる。

5 学習展開

段階	学習内容	指導上の留意点	評価の観点
導入 5分	ソクラテスの「無知の知」 ①問 題：人間として善く生きる には？ = アレテー(徳)の追求	・問題を共感・共有できるよう例 示し、「翻訳」の工夫をする。	・ソクラテスの問題意識を 「共感」できたか。
展開 35分	②出発点：デルフォイの神託 →「ソクラテスに優る知者はいない」 ③方 法：問答法…対話(ディア ロゴス)を通じて、相手に自分 から真の知を見いだすように導 く方法 ④真 理：無知の知…アレテー (徳)について知らないことを自 覚すること →デルフォイの神託の意味(ソ クラテスの解釈 = 「汝自身を 知れ」) ⑤解 答：魂への配慮…人間とし て善く生きるには、魂への配慮 をして生きることである。	・「デルフォイの神託」から、ソ クラテスのアレテー追求が始ま り、その追求方法が「知者」と 思われる人たちとの「問答」で あったことを簡潔に説明する。 ・「アレテー」に関する無知の自 覚から、真の知の探求(学習意 欲)が生まれることについて例 示を工夫し、「翻訳」する。 人間として = 魂への 善く生きる 配慮 上の「等式の証明」という問 題に「翻訳」して、なぜソクラ テスはそう考えたのかを問う。	・ソクラテスが発見した「無 知の知」の真理を生徒たち も追思考できたか。 ・「汝自身を知れ」が、ソク ラテスの解釈では、「無知 の知」であることを理解で きたか。 ・「等式の証明」により、ソ クラテスの思想を「追思考」 させることが効果的になさ れたか。
終結 10分	・「知徳合一」…“徳は知である” ・「福德一致」…善く生きてこそ 幸福となる ・「ソクラテスの死」の三部作(プ ラトンの著作)…『ソクラテス の弁明』『クリトン』『パイドン』	→徳を知っている者が、善く生き ることができる = 主知主義の思 想や「観想(テオーリア)」の態 度も説明する。 →プラトンの著作や教科書の絵画 写真から「ソクラテスの死」と ポリスの法に従うという論理と 倫理を説明する。	・「主知主義」の思想と「観 想(テオーリア)」の態度は 生徒に伝わったか。 ・「ソクラテスの死」の論理 と倫理を理解させることが できたか。

◆教育心理学の巨星ブルーナー氏は、2016年6月に亡くなられました。100歳であったとのこと。謹んで哀悼の意を表します。